

## D. H. ロバートソンの分配論——政策論からの再構成——

同志社大学 仲北浦 淳基

jnakakit@mail.doshisha.ac.jp

### I はじめに

本報告では、ロバートソンが講演や講義で展開した政策論議を検討することで、彼の 3 大論点の 1 つである分配論の再構成を試みる。以下では、ロバートソン経済学のコア概念である「努力 effort」を概説し、その概念と彼の分配論との関係性を示した上で、ロバートソンの分配論賃金論の特徴を明らかにする。

ロバートソンは、第 3 作目の *The Control of Industry* (1923, 1) において、経済問題を (1) 生産 (2) 分配 (3) 管理 (組織) の問題に大別した。そして、実際に生じている経済問題は、これら 3 つの問題が複雑に絡み合った結果であるとし、これら 3 つの問題を 1 つずつ解決していくことが必要だと説いた。ただし、その著作は (3) 管理 (産業組織) の問題に焦点を当てており、また、(1) 生産の問題は、生産活動の周期的な盛衰という観点から、彼の経済変動論において深く追究されている。しかし、(2) 分配の問題はあまり明示的に議論されていない。このような理由もあってか、ロバートソンの分配論はほとんど注目されてこなかったように見える。

では、ロバートソンは生産・分配・管理という 3 つの問題を自ら提起しておきながら、分配論を展開しなかったのだろうか。決してそうではない。たしかに分配論に関して、単行本としての体系的な研究は残されていないが、彼の言説を広く検討すれば、分配論が多く展開されていることに気づかされる。

ロバートソンは、(2) 分配の問題をこのように言い換えている。「産業の進歩によって得た成果をいったいどのように分配すれば、人間の厚生にもっと貢献し、私たちの正義の理念にもっと合致させることができるか」(*ibid.*)。つまり、ロバートソンにとって、分配論は「正義の理念 ideas of justice」と結びついていた。ゆえに、彼の分配論は、純粹理論であるにとどまらず、価値判断を含んだものだったのである。

よって、ロバートソンの分配論を知るためには、価値判断をも含めた彼の政策論がヒントになりうるだろう。実際、1950 年代における彼の講演録を一覧すれば、賃金政策や財政論といった分配に関するテーマが並んでいることがわかる。これらの議論を検討すること

によって、ロバートソンの分配論を再構成することができるのではないか。また、それと同時に、彼の政策論を部分的に整理することができるのではないか。これが本報告の着想である。

本報告では、報告者がかねてから重視してきたロバートソンの「努力」概念をコアとした実物理論を起点として、その派生として彼の分配論を捉える。すなわち、次のような過程で考える。すべての経済主体（人間）は、心身的苦痛（「努力」）を負担することで生産活動を行っている。そして、その活動によって財・サービスといった成果（「満足」）が生み出される。では、「努力」の成果である「満足」をどのように分配されるべきか、と問うのである。また、経済は成長していくが、その成長の果実はどのように分配されるべきか。資本主義経済においては、資本家と労働者のみならず、企業家・銀行家・貯蓄者・政府など、様々な種類の主体がいる。これらの主体による「努力」が複雑に作用しあって「満足」を生み出すといった状況において、どのように分配するべきか。このような規範的な問いに対するロバートソンの解答を部分的に明らかにしたい。

## II ロバートソンの価値論——価値基準としての「努力」

ロバートソンは、マーシャルと同様に、生産要素を「自然 Nature」と「人間 Man」に大別しており、それらの活動から財・サービスが生み出されると考える。たしかに「自然」に対する「人間」の支配力は向上しているが、「自然」を完全にコントロールすることはできないという観点から、ロバートソンは主に「人間」の活動を分析対象とする。こうして、彼は経済学を「人間の行為に関する研究」(Robertson 1930, 43)と捉えている。

では、「人間」の活動がどのように価値を生み出すのか。ロバートソンは「人間」の普遍的な心身的苦痛を含意する「努力 effort」という概念を用いてそれを説明している。すなわち、すべての人間は、心身的苦痛（「努力」）を負担することで生産活動を行っている。そして、その活動によって財・サービスといった成果（「満足 satisfaction」）が生み出される。また、その活動量（「努力」量）は、「満足」から得られる効用 utility と「努力」に伴う負効用 disutility の差分である「準満足 net satisfaction」が最大化される（限界効用と限界負効用が一致する）水準で決定される。ロバートソンにとって、この原理はどのような経済主体にも共通する普遍的な原理である。

「準満足」が最大になるように決定された「努力」量は、その生産性が一定であれば、そのまま産出量を意味する。そして、市場においてその財・サービスが他の財・サービス

と交換されることで価格（相対価格）が決定する。しかし、その価格の背後には、人間の「努力」を基準とした絶対的な価値が想定されているのである<sup>1</sup>。

### III ロバートソンの分配論——生産要素の需給分析

このように、ロバートソンは「努力」という抽象的概念から価値論を展開したが、実際にはさまざまな「努力」の種類が存在する。ロバートソンはそれらを「勤労 working」、「ラッキング lacking」（「待忍 waiting」）、「リスク負担 risk baring」の3つに大別した。そして、それら各種の「努力」への報酬として、それぞれ「賃金・給与」、「利子」、「利潤」が分配されると考えるのである。

これらの分配率は、財・サービスと同様に、基本的には需要と供給によって決定される。例えば、賃金は労働需要（労働の限界生産力）と労働供給（人口、能力など）によって決定される。

ただし、現行の賃金制度においては、生産活動の方針の決定と実際の労働が分担されており、各経済主体（労働者、資本家、実業家）の意思決定が一致するとは限らない。このような労資の対立において、雇用主側が有利な立場にある場合、賃金交渉において、雇用主側の力が強くなるため、賃金はより低く設定されるだろう。つまり、分配率は、市場での需給関係のみならず、需要者と供給者の力関係によっても支配されるのである。

しかし、だからと言って、賃金を人為的に高く設定することが適当であるとは言いきれない、とロバートソンは主張する。というのは、人為的な賃金上昇は、2つの反応を引き起こすからである（Robertson 1930, 49）。第一の反応は、「既存の〔労働の限界生産力〕曲線に沿った動き」であり、第二の反応は、その「曲線の累積的な下方移動」である。

しかし、なぜ、人為的な賃上げをすると、労働の限界生産力そのものが低下するのか。ロバートソンによれば、人為的な賃上げによって「利潤が低下することと、その当然の結果として、資本と事業の供給が抑制されることとに起因する」（ibid.）。さらに、「その〔労働の限界生産力曲線の〕形と高さは、技術的な問題に依存し、……貯蓄を結晶化して蓄積

---

<sup>1</sup> ここには、リカードの絶対的価値尺度とマーシャルの「真実費用」の思想が流れていると考えられる。「リカードやマーシャルからの知的系譜を引いていると主張する者は、この行程〔オーストリア学派の効用価値論〕を簡単に受け入れることはないだろう。絶対的な真実価値の概念を放棄することは、その結果生じる問題の複雑さがいかに大きくなるうとも、経済理論の発展に逆行する一歩だろう。当分の間は、世界中でなされる骨折りという大きな負担を生み出す種々の『努力と犠牲』を、いかなる共通単位でも測ることはできないけれど、……この概念については、頑として固守しなければならない」（Robertson 1921, 245）。

された基金の大きさに依存する」(ibid., 56). つまり、人為的な賃上げによって、「ラッキング」供給者と「リスク負担」供給者による活動が委縮して、資本供給量とその生産性(質)が低下し、ひいては、労働の限界生産力をも減退させてしまうのである。こうして、労働者のために実施されたはずの賃金的人為的な引き上げが、資本の生産性の低下を招き、結局は、労働の限界生産力もが減退して、雇用人数の大幅な減少を引き起こしてしまうのである。

以上のようなロバートソンの主張は、生産における労働・資本・事業の調和を強調したものである。生産活動において、労働・資本・事業は一体となっているのである。ロバートソンは、「社会主義国家では、国民所得から必要な資本蓄積を差し引いた分のすべてを、賃金が飲み込んでしまうまで上昇するかもしれない」(ibid., 56) というドップの主張に反対している。それは、この主張が、生産における資本と事業という要素をあまりにも軽視しているからである。生産においては、労働と協同する資本・事業が必要であるのみならず、彼らが活動する舞台である事業 enterprise も必要である。これを用意するのが、事業供給者(「実業家」)であり、彼らの創意工夫によって生産効率は上昇していく。このようにして生じた価値が「利潤」として彼らに分配されるのである。

#### IV 生産性を反映する労働本位の分配論

以上のように、ロバートソンは賃金論を展開するときでも、労働・資本・事業といったそれぞれの「努力」を常に考慮に入れた。賃金交渉において労働者側が不利だとしても、人為的な賃金上昇政策は、資本・事業の質と量を低下させることで、逆に労働者を苦しめてしまうという主張であった。

しかし、第2次世界大戦以降、戦後社会主義の風潮から、労働組合の力が非常に強くなった。賃金の上昇圧力が強力になることで、物価上昇と賃金上昇が連鎖するインフレ・スパイラルが生じていた。

この問題に直面して、ロバートソンは生産性の上昇に注目した<sup>2)</sup>(Robertson 1951, 130-131; 1955b, 125; 1957a, 73)。というのは、生産性の向上は物価下落の圧力を生むため、貨幣賃金が一定であっても実質賃金は上昇するからである。ゆえに、過度なインフレの連

---

<sup>2)</sup> これが、いわゆる「努力の生産性 productivity of effort」である。ロバートソンは、経済変動論の実物的要因を「努力の生産性」という視点から整理した(仲北浦 2018)。このような、彼の概念は分配論においても重要な地位を占めている。

鎖を抑える<sup>3</sup>ためにも、労働組合は貨幣賃金の上昇ばかりを主張するのではなく実質賃金に注目すべきだ、とロバートソンは主張するのである。

「マーシャルの教えに同調して、私が常に理想的だとみなしているのは、このような労働本位 labour standard である。それは、生産性上昇の結果として価格の正常な下落を伴うものである」(Robertson 1957a, 81)。

このように、ロバートソンは「努力の生産性」に基づいた分配をマーシャルの伝統に位置付けた上で、貨幣価値（あるいは物価）の変動による影響を受けない人間の労働（「努力」）という実物要素を重視したのである。彼は、貨幣の価値あるいは物価を直接的にコントロールできない以上、人間の「努力」こそが「安定的な価値基準」(Robertson 1957b, 93-94; cf. Robertson 1955b, 123; 1956b, 69) であると考え、それに基づいた報酬の分配を主張したのである。

#### 【参考文献（一部抜粋）】

- Robertson (1921), "Economic Incentive," *Economic Review*, Vol. 1, No. 3, Oct., 231-45.  
—— (1930), "Wage-Grumbles," in Robertson (1931), *Economic Fragments*, I, 42-57.  
—— (1951), "British National Investment Policy," in Robertson (1952), *Utility and All That*, Pt. II, Ch. 7, 116-31.  
—— (1955a), *Wages*, in Robertson (1952), *Utility and All That*, Pt. II, Ch. VIII, 129-46.  
—— (1955b), "The Problem of Creeping Inflation," in Robertson (1956), *Economic Commentaries*, Pt. two, Ch. VII, 116-28.  
—— (1956a), "The Role of Persuasion in Economic Affairs," in Dennison and Presley, eds. [1992], Pt. III, Ch. 12, 156-69.  
—— (1956b), "The Credit Squeeze," in Dennison and Presley eds. [1992], Pt. II, Ch. 4, 59-70.  
—— (1957a), "Wage Inflation," in Dennison and Presley, eds. [1992], Pt. II, Ch. 5, 71-81.  
—— (1957b), "Income and Claims," in Dennison and Presley, eds. [1992], Pt. II, Ch. 6, 83-94.  
—— (1961), *Growth, Wage, Money*, London: Cambridge University Press.

---

<sup>3</sup> ロバートソンは、長期的な契約に歪みをもたらすことを理由に、インフレを抑制すべきと考えた (*Money*, 11; 1955b, 122)。